

第14回 札内川技術検討会が開催されました

第14回札内川技術検討会が令和4年3月7日（月）及び3月11日（金）に開催されました。

札内川技術検討会 委員名簿（敬称略、五十音順）

氏名	所属等
泉 典洋	北海道大学大学院 公共政策学連携研究部 教授
巖倉 啓子	国立研究開発法人 土木研究所 寒地土木研究所 寒地水圏研究グループ 水環境保全チーム上席研究員
大串 弘哉	国立研究開発法人 土木研究所 寒地土木研究所 寒地水圏研究グループ 寒地河川チーム 上席研究員
斎藤 新一郎	環境林づくり研究所 所長
中村 太士	北海道大学大学院 農学研究院 教授
藤巻 裕蔵	帯広畜産大学 名誉教授
柳川 久	帯広畜産大学 教授
渡邊 康玄	北見工業大学 教授
オブザーバー	国立研究開発法人 土木研究所 寒地土木研究所

注) 第14回札内川技術検討会は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、オンライン形式により開催した。

【第14回検討会の議題】

- (1) 令和3年6月上旬出水及び中規模フラッシュ放流による河道内変化状況
- (2) 令和3年度 動植物調査結果
- (3) 令和4年度 札内川自然再生（礫河原再生）実施計画書（案）

【委員からの主な意見】

議題(1)「令和3年6月上旬出水及び中規模フラッシュ放流による河道内変化状況」に関する意見

- ・ 令和3年6月上旬出水で中規模フラッシュ放流に対して樹木流亡面積が大きい要因として、中規模フラッシュ放流とのハイドロの違いに着目している点について、ハイドロによる河道内変化の違いを分析してみてもどうか。
- ・ 水衝流 P 工区の河道内変化の要因については、対岸に砂州が形成されている点を踏まえ、再度整理すべきと思う。

議題(2)「令和3年度 動植物調査結果」に関する意見

- ・ ケショウヤナギ実生の分布範囲と比高の関係に着目して整理がされているが、母樹の分布や種子散布時期の定着場所となる礫河原の有無も影響すると考えられる。
- ・ チドリ類の確認数は全体の傾向として増えているので、問題無いだろう。

議題(3)「令和4年度 札内川自然再生（礫河原再生）実施計画書（案）」について

- ・ 0工区は他工区との比較にも必要なため、モニタリングを継続した方が良い。
- ・ 置砂は、底生動物の有識者と協議しながら、継続したほうが良い。置砂を実施する場合は、可能な範囲で河道掘削などにより発生した掘削土を流用するのが望ましい。
- ・ 今後、事業成果のとりまとめ、対外的な事業の説明にあたり、グリーンインフラ、SDGs の視点を含めてまとめるのが良いと思う。
- ・ 流域治水が推進されている中で、樹林化を抑制して礫河原を維持することは流域治水の効果の一つと考えられる。事業のとりまとめでは、治水面、環境面、可能であれば利用面を含めて総括評価が必要と思う。
- ・ 事業の目的はケショウヤナギ、礫河原再生が目的であるが、その根本は河道管理であると思う。事業終了後も放流の継続とともに、定期的に河道管理の状況について確認できる検討会等が必要と考えられる。

■今後の予定

- ・ 本日の議論を踏まえ、実施計画書の見直しを行い、関連する調査、検討の準備を進めていきたいと考えている。
- ・ 令和4年度のフラッシュ放流については、今後の融雪期の状況を踏まえて検討し、計画を立てた段階で改めてご連絡させていただく。引き続きご指導をお願いしたい。

【お問い合わせ先】

札内川技術検討会事務局：北海道開発局 帯広開発建設部 治水課 札内川技術検討会担当まで
帯広市西5条南8丁目 TEL：0155-24-4105、FAX：0155-27-2377